

家内工業史研究序説

大石 恵子

I はじめに

イギリス社会において、貧困は長い間、怠惰、飲酒、無思慮等個人の道徳的責任の結果だと考えられてきた。⁽¹⁾しかし、メイヒューやミーンズ⁽²⁾によって、その実態を、いくらかでも解明しようとの努力がなされるにつれ、更には、1886年から始まるブースのロンドン調査を決定的な契機として、貧困が、必ずしも個人の道徳的な責任によるのではなく、低賃金、不規則労働等の雇用の問題に、その第一の原因があるとの認識が、次第に広まってきたのである。⁽⁴⁾

ところで、このような低賃金、不規則労働或いは長時間労働等の劣悪な労働条件こそが、当時、苦汗労働と呼ばれていた雇用形態を特徴づけているものであった。都市における貧困の問題が、産業の側面から捉えられた時に、その原因としての苦汗労働が、一つの大きな社会問題として認識されたのである。

歴史的にみると、この苦汗労働という言葉は、元来は、自らが長時間労働を行う雇われ職人に対して使われたものであった。しかし、次第に意味内容が拡大され、1888年に始まる「上院苦汗労働委員会」では、「ある特別な産業組織を指すのではなく、低賃金、長時間労働、非衛生的な労働環境等、労働条件における悪を表現するもの」として使用されるに至った。⁽⁵⁾B・ウェップは、苦汗労働にみられる特徴を、次のように述べている。「大量の生産が、大工場によって行われることなく、小親方の目につかない仕事場や、労働者自身の住居で行われている。その結果、工場法の恩恵を受けることなく、更に労働組合による組織化も望めない。……その弊害の最も顕著に表われるのが家内工業である」つまり、小規模生産、或いは家内工業といった経営形態が、工場法と労働組合という、労働条件を改善する2つの要素を欠くが故に、苦汗労働を生むという認識である。⁽⁶⁾

産業革命の開始から、すでに一世紀以上を経て、大規模な工場生産が、着々として進行していく一方で、なお小規模生産、家内工業が広範に残存し、その為に、工場の平均規模は、依然として小さいものであったことは、すでに指摘されているところである。⁽⁷⁾大工場との競争が激しくなっていくなかで、これら小規模生産の存立を可能ならしめていたのは

(8)
何なのであろうか。それは、労働条件の劣悪さにもかかわらず、なおそのような仕事に
こうとする安価な労働力の存在に他ならない。家内工業存立の第一の基盤は、この労働者
の存在、すなわち大量のチープ・レーバーの存在にこそ求められるべきであろう。

このように、家内工業の基盤を、チープ・レーバー、特に既婚婦人やユダヤ人の存在に
求める見解は、すでに幾つかの精緻な研究によって、明らかにされている。⁽⁹⁾だが、そのチ
ープ・レーバーとは、どのような構造をもつものであったのか、すなわち、どのような経
過を辿って形成されたのかについては、言及されることが少なかったといってよい。した
がって、今後19世紀の家内工業問題を考察するにあたって、われわれに残されている問題
は、これらチープ・レーバーが、どのように形成され、どのような社会的基盤をもってい
たのか、これを明らかにすることであろう。本小論は、この課題に接近しようとするもの
である。但し、対象は主にロンドンに限られる。けだし、家内工業は、首都ロンドンにお
いて、最も鋭い形で表われたからである。

(1) M. Rose, *The Relief of Poverty*, London, 1972, p. 7.

(2) H. Mayhew, *London Labour and the London Poor*, London, 1861.

(3) A. Means, *The Bitter Cry of Outcast London*, London, 1875.

(4) ブースは、貧困の原因を①雇用の問題(失業、低賃金等)②習慣の問題(飲酒、怠惰等)③
環境の問題(大家族、疾病等)の3つに分け、階層AとB(極貧層)については、①55%、②
14%、③27%、階層CとD(貧困層)については、①68%、②13%、③19%という結論を出し
ている。(C. Booth, *Life and Labour of the People in London*, London, 1902, 1st
series, vol. 1, p. 147.)

(5) Select Committee of the House of Lords on the Sweating System, 1888-9, *British
Parliamentary Papers, Industrial Relation*, vol. 16, pp. 700-701. (以下S. C. on
the Sweating System, P.P. と略す) このようなとり方が一般的であるが(J. A. Hobson,
Problem of poverty, reprint, New York, 1971, pp. 66-68; C. Black, *Sweated
Industry and the Minimum Wage*, London, 1907, p. 1.)これに対して、バーネットら
の、苦汗労働下請制度であるとの見解がある。(S. C. on the Sweating System, P. P.
op.cit., vol. 13, p. 11.)しかし、B・ウェブは、下請制度のあるところ、必ずしも苦汗
労働とはならない、又下請制度のないところでも苦汗労働は存在することを理由に、この見解
に反対している。(B. Webb, *My Apprenticeship*, Penguin Book, London, 1971, p.
334. 高橋克嘉「ウェブの労働問題研究(2)」『フェビアン研究』、第12巻第6号、1961年、28
-31頁)

(6) B. Webb, op. cit., pp. 336-338.

(7) R. W. Breach & R. M. Hartwell, *British Economy and Society 1570-1970*,
Oxford, 1972, p. 108.

(8) 一般的には、小規模生産が、資本にとって有利な点は、次の幾つかがある。需要の不規則な
産業においては、その変化によるロスを、最小限度におさえることができる。地代、光熱費等
の節約。工場法の適応を免れる。労働者による組織化が困難である等々。(J. A. Hobson,
op. cit., pp. 96-99.)

(9) 外池正治「中小企業問題の国際的研究」山中篤太郎編『経済成長と中小企業』1963年；高橋
克嘉，前掲論文。

Ⅱ 小規模、家内工業形成の必然性

(1) 資本の側面

ロンドンの経済的特殊性は、次の3点に求めることができる。第一に、大きな港湾都市であること。その地理的条件は、最初からロンドンに海運の性格を与えていたといわれる。⁽¹⁾この条件から、造船業、倉庫業、精糖業等が発達した。第二に、最大の消費地を抱えていること。これは同時に、奢侈品に対する需要も多いことを意味し、一般の消費財と共に、時計、宝石、高級家具、衣料等の地域集中を促す。第三に、政治の中心地であること。⁽²⁾議会関係の印刷業や、新聞の発達は、この条件による。

一般に、産業革命以前においては、これらの条件、特に第2の条件は、ロンドンの産業に有利に作用していた。手工業の段階では、その工程からいって、製品は高価なものにならざるをえず、職人達はその市場を求めて、ロンドンに集ったからである。しかし、産業革命を迎えると、事情は異ってくる。産業革命は、大規模な工場制度の招来をその特徴としていたが、その展開にとって不可欠の石炭、鉄の産地は、ロンドンから遠く離れていた。産業革命が、北部のヨークシャー、ランカシャーを中心に展開したのは周知のことである。しかし一方では、イギリスが産業革命を経て、世界の工場になるにつれ、金融、商業の中心地として、多くの銀行、事務所がロンドンに集中し、地代は高まる一方となっていく。石炭、鉄の産地から離れていたこととも合わせ、大規模な工場経営、特に生産財の生産は困難となり、その為に、消費財、完成品の製造が、小規模に行われるという傾向が強くなっていったのである。⁽³⁾「ロンドンには主導産業が存在しない」といわれるのは、⁽⁴⁾以上の要因が強く作用してのことである。ブースによれば、1891年の1企業当りの平均被用者数は、最も多い製本業で51人、ついで製紙業の38人、その他仕立業12人、家具製造業10人、製パン業6人という状態である。⁽⁵⁾ブースは、かかる小規模経営の存在を、単なる残存とみるのではなく、産業が生存競争の中で、やむなく適応していった形態である、と指摘しているが、これはロンドンの産業の置かれた状態をよく示している。⁽⁶⁾

このように、ロndonは小規模、消費財生産を特徴とする産業構造をもつに至ったのであるが、これに適応しえない産業はロンドンから離れる。⁽⁷⁾しかし、残った産業にしても、地方の工場生産との競争に直面しなければならなかった。交通機関の発達と共に、市場への接近は、かつて程重要ではなくなり、地方において、工場経営による消費財の生産も行われはじめたからである。これに対抗するには、経費を最少限度におさえなければならず、それは地代の節約、賃金の引下げといった形をとることになる。ここに、苦汗労働の温床ともいわれる家内工業が、ロンドンに蔓延した一つの原因が示されているのである。

(2) 労働の側面

では次に、ロンドンにおける労働者の存在形態は、どのようになっていたのであろうか。家内工業の基盤といわれたチープ・レーバーの存在に目を向けてみよう。ホブソンは1300万人の労働者のうち、200万人が過剰労働力であると述べているが、彼らはどのようにして形成されたのか。この問題を考えるにあたって、「チープ・レーバーの供給源」「雇用構造の特殊性」という2点から接近していきたいと思う。

(1) チープレーバーの供給源

当時、ロンドンの家内工業に大きな責任ありとされていたのは、ユダヤ人⁽⁹⁾と合わせて、地方からの流入者⁽¹⁰⁾であった。貧しい生活に馴れている地方出身者が、ロンドン生れの人々の生活条件、雇用条件までも引き下げているのだと考えられていたのである。ところが、その弊害が強調されてはいるものの、では実際に、流入者達がロンドン社会に、どのような社会的影響を及ぼしたのかについて言及されたことは、ほとんどなかった。したがって、J・スミスがブースの調査において、彼らはどこから、どのような社会層から、どのような原因によって、ロンドンへやってくるのか。そして、どのような職業に就き、ロンドン社会にどのような影響を与えるのか、といった設問を提起し、これに答えようとしたのは注目すべきである。ここではその詳細を紹介する余裕はないが、簡単にまとめると次のようになる。

流入者は大きく分けて、「流れ者」と「明確な目的をもった者」の2つに分類される。前者は、慈善事業の中心地たるロンドンに、確たる目的もなく集めてくるのであり、その移動距離は一般に短く、農村地帯における零落した者の場合が多い。一方、後者は、若い健康な人々で、ロンドンでの職業にも、あらかじめ目算をもってやってくる。農村よりもむしろ小都市から、比較的長距離の移動によってやってくる。流入者の年齢は、10代後半から20代後半にかけての青年層が圧倒的に多く、ロンドンへの流入の主流を占めているのは、むしろこの後者であることが明らかである。彼らが都会へやってくる原因は、(1)50%程もロンドンが高いといわれる賃金差、(2)都会ではもはや養成できなくなったオールラウンドマン、all-round man、健康な労働力に対するロンドンの需要、(3)劇場、マーケット、娯楽施設等々人々を引きつける都会生活等が考えられるが、総じて、よりよい雇用を求める経済的移動といえる。彼らは警官など健康さを要求される職業に就き、犯罪者、労役場収容者等社会の最下層には、彼らの占める割合はむしろ少ない⁽¹²⁾。各地区において、地方人の割合が多ければ多い程、その地区の貧困者の割合は少ないという事実すらある。

このスミスの説に対しては、ジョーンズが完全には承認し難いことを指摘している⁽¹³⁾

が、地方人がロンドンの生活水準を下げているのではなく、逆に、ロンドンの健康なる部分が、これら地方人によって支えられているのは確かであろう。むしろ、ここで問題となるのは、都会生活が、人々の健康に与える悪影響である。ゴミゴミと密集した住宅、日の当たらない埃だらけの部屋、完備されていない排水、これらの中で暮す都会の人々の死亡率は、地方の2倍ともいわれている⁽¹⁴⁾。地方から来た健康な人でも、長年ロンドンに住むにつれ、その健康を害し、社会の下層へと沈殿していくのである。それは健康の面のみに限らない。都市化による伝統社会の崩壊、これが及ぼす精神的動揺、荒廃も見逃しえないところである。

ところで、市中心部は、すでに1860年頃迄に飽和状態に達しており、この時点では、人口増加という面ではピークを過ぎていた。都会の劣悪な生活環境から逃れ、健康のために、郊外へ居を構える流出者の数が増加したためである。だがそれが可能なのは、通勤の交通費を支払うことができ、かつ安定した職業をもつ中流階級以上の人々に限られる。比較的余裕のある人々は郊外へと移り、流入者達は、しばらくはロンドンの健康なる部分を支えるが、しかし、都会生活に長く曝されるにつれ、下層社会へと転落し、市中心部に取残される。この彼らがチープ・レーバーを形成していくのである。施物や慈善を求める人々の姿は、目に映りやすく、また、ただでさえ雇用の不安定なロンドンに、職を求めてやってくる地方人の姿は、生活条件を引下げるものとして、ロンドン生れの者を怒らせるものであった。だが実際は、結果的には彼ら地方出身者も、チープ・レーバーを形成することになるとはいえ、それは彼らの責任ではなく、都会生活自体がもつ作用であったのである。

(d) ロンドンの雇用構造の特殊性

「ロンドンは少年労働者にとっては天国である」⁽¹⁶⁾とのブースの言葉が端的に示すように、ロンドンにおいては、青少年と成人に対する労働市場が全く異なり、しかも前者に対する需要が圧倒的に多い。ブースは各職業を、次の3つに分類している⁽¹⁷⁾。(1)若年層の多い雇用—例えば工場労働者、家事労務、商業事務等。(2)中年層の多い雇用—ドック労働者、ガス労働者、教育、鉄道等。(3)老年層の多い雇用—船大工、靴製造、庭師等。(1)には将来性のあまり見込まれない職業が多く、(2)、(3)には、衰退産業、雇用の不安定な職業が多いことに注目したい。学校を終えたばかりの少年の多くが、いわゆる少年向きの職業に入り、ある一定の年齢に達すると、その職業から排除されてしまう。格別の技術をもたない彼らが、チープ・レーバーの一角を形成していくのは必然的ともいえる。

この傾向は、婦人労働者の場合に、一層顕著、かつ単純な形で表われている。婦人の雇用労働の第一にあげられるのは家事労務であるが、これに対する需要が、ロンドンに

は特に多い。一般に女子の方が男子よりも移動率が高いといわれるのも、一つには、この家事労務の職を求めていることである。ところがこの職業は、住込みというその性質上、結婚すればやめなければならない。この彼女達が、結婚後経済的に逼迫した時、技術も要求されず、しかも家事の合間に行えるという家内労働者へと、沈黙していかざるをえなくなるのである。⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾

次に、産業構造の変化も考慮に入れなければならない。既述のように、産業革命はロンドンからは離れた所で展開したが、しかし、これがロンドンの産業にとって、全く無関係だったというわけではない。ある産業に対しては、決定的な打撃を与えたのである。その典型的な例が、絹織物業と造船業である。1824年には5万人といわれた絹織布工が、60年代には3,300人となり、また造船工の場合は、1861年から1891年にかけて72.5%の減少を示している。かかる衰退産業からはき出された人々が、チープ・レーバーの1つの要素となろう。もち論、衰退産業と同時に、興隆していく産業も存在する。衣服、家具等がその例であるが、これらは典型的な小規模、消費財産業で、季節変動の波を受けやすく、安定的な雇用を提供するとはいい難いものであった。⁽²⁰⁾⁽²¹⁾⁽²²⁾

以上のような経過で、資本の側では小規模経営への要請が、そして労働の側ではチープ・レーバーの形成が進み、この2つが合致して家内工業が広がる基盤ができたのである。

では次に、かかるチープ・レーバーの存在形態を、家内工業が広範に蔓っていた既製服製造業について、具体的にみてみよう。

- (1) R. J. Mitchell & M. D. R. Leys, *A History of London Life*, London, 1958, p. 4. 松浦起訳『ロンドン庶民生活史』1971年、9頁。
- (2) G. S. Jones, *Outcast London*, Oxford, 1971, p. 19; J. E. Mirtin, *Greater London*, London, 1966, ch. 4.
- (3) 1851年センサスによれば、ロンドンにおいて300人以上を雇う工場は12のみで、10人以下の工場が全体の86%を占めている。また、1861年センサスによると、被用者数の多い産業は、衣服、木材・家具、金属機械、印刷・出版、精密器械であるが、金属機械を除いて、すべてが完成品工業であり、その金属機械にしても、主に修理部門に限られていた。(G. S. Jones, op. cit., pp. 21, 358.)
- (4) P. G. Hall, *The Industries of London since 1861*, London, 1962, p. 24.
- (5) C. Booth, op. cit., 2nd series, vol. 5, p. 56.
- (6) Ibid., p. 56.
- (7) 造船業がその例。ブースは、問題は産業は去ったが、人々は残ったところにあると指摘しているが、核心をついているといえよう。(Ibid., 1st series, vol. 4, p. 340.)
- (8) J. A. Hobson, op. cit., p. 17.
- (9) ここではユダヤ人の問題を特に扱わない。その数が、問題となっているほど多くはないし、又活動分野も限られているからである。しかし、彼らが特定地域に集中していること、独自の救済組織をもっていること、小親方への志向が強いこと、これらの点で、苦汗労働形成の

一つの原因となっているのは確かである。

- (10) 1881年センサスによると、ロンドンの人口1,000人のうち、629人がロンドン生れ、343人がイギリスの他地区生れ、28人が外国人という割合である。(C. Booth, op. cit., 1st series, vol. 3, p. 61.) また年間の流入者は、ほぼ1万人と推計される。(J. A. Hobson, op. cit., p. 47.)
- (11) J. Smith, "Influx of Population," C. Booth, op. cit., 1st series, vol. 3, pp. 55-165.
- (12) ロンドンの成年男子 100人につき、ロンドン生れの占める割合は46人であるが、労役場収容者の58%、慈善応募者の70%がロンドン生れである。逆に警官の場合は、70%が地方出身者によって占められる。(J. Smith, op. cit., p. 83.)
- (13) G. S. Jones, op. cit., pp. 127-151.
- (14) J. A. Hobson, op. cit., p. 55.
- (15) 19世紀半ば頃に郊外が形成されはじめるが、その果たした役割については H. J. Dyos, *Victorian Suburb*, Leicester, 1961. を参照。
- (16) C. Booth, op. cit., 2nd series, vol. 5, p. 43.
- (17) Ibid., 2nd series, vol. 5, pp. 44-48.
- (18) E. G. Ravenstein, "The Laws of Migration," *Journal of the Statistical Society*, vol. 48, part 2, 1855, p. 199; H. A. Shannon, "Migration and the growth of London 1841-91," *Economic History Review*, vol. 5, No. 2, 1935, p. 84.
- (19) だが、すでに家事労務へのなり手が、減少してきていることが指摘されている。「このような隷属的職業よりは工場労働を」という声は、婦人の職業観の変遷を知るうえでも興味深い。何よりも、チープ・レーパーとしての婦人労働者に、何らかの前進的な変化を予測させるものでもある。(F. Darwin, "Domestic Service," *Nineteenth Century*, vol. 28, 1890, pp. 286-296.)
- (20) G. S. Jones, op. cit., p. 101.
- (21) C. Booth, op. cit., 2nd series, vol. 5, p. 60.
- (22) その他には、ロンドンに限らず、イギリス全体でみられる現象であるが、産業の高度化による熟練職種の消滅、婦女子による代替、季節的失業等が、チープ・レーパーの形成要因として考えられよう。

Ⅲ 既製服製造業における家内工業

(1) 家内工業の形成

既製服製造業をも含め、衣服産業は、これといった主導産業をもたないロンドンにおいて、かなり大きな比重を占める産業であり、⁽¹⁾古くから、この地で行われていた。流行に敏感であり、かつ個人に合わせて作らなければならないというこの産業の性格が、市場との接触を第一に必要としたためである。

一口に衣服製造業といっても、その製造内容、方法は実に多種多様であり、したがってそれに従事する人々も、また様々である。伝統的方法をそのままに続けている熟練仕立屋、請負人としてのユダヤ人、ランカシャー等の強い組合をもった工場労働者、そして家

事の合間に針を動かす既婚婦人等々。⁽²⁾既製服製造業の場合は、その被用者の多くが婦人である。針は紡車以上に、昔からの婦人の道具であり、1891年の職業センサスにおいて、衣服製造業は、家事労務に次ぐ第二位の地位を占めている。⁽³⁾

しかし、苦汗労働として、彼女達の労働条件が問題となるのは、1880年代に入ってからのことである。1863年の枢密院の医療報告によると、婦人の裁縫師は次の2つの階層に分けられる。雇用主の家に寄宿して仕事を行う人々と、自分の家から仕事場に通う人々であり、前者の方が、質の良い裁縫師とされている。一般に彼女達は、14.5才で徒弟に入り、2年間の後に見習職人、更に二級職人、一級職人、職長という道をたどる。⁽⁴⁾この時点では、家内労働はほとんど問題となっていないし、婦人も、技術をもった熟練労働者として訓練されていることがわかる。では何故、これが80年代になると苦汗労働として、問題となったのであろうか。それは、既製服製造業の興隆であり、⁽⁵⁾その前提となったミシンと帯鋸の発明によるものであろう。⁽⁶⁾この機械の中で、比較的高価なのは帯鋸のみであり、織元や小親方が、自分の問屋、仕事場で裁断を行い、裁縫を、各自家にミシンをもった婦人に下請に出すという形態がとられたのである。小親方には1ポンドあればなれるといわれ、小親方を志向するユダヤ人や、人に使われるのを嫌う人々が、競って小親方になっていった。彼らにとって、チープ・レーパーとして形成されていた婦人は、格好の労働力だったといえる。

この既製服産業の興隆で、今迄、家で作るか、古着ですませていた労働者の手にも届くような安価な衣料を作ることが可能となった。しかし、これを経営として成り立たせるためには、大量生産が必要であり、しかも一方では、地方の工場で作られる製品とも競争しなければならなかった。これに対処するために、可能な限りの分業体制がとられることになる。もはや仕立師は存在せず、例えばボタンホール専門、かがりつけ専門といった人が存在するのみとさえいわれるに至ったのである。このため、技術の習得はいとも簡単なものになり、ますます多くの婦人が、労働市場に溢れることになったのである。

一般的には、機械の導入は、工場制度をもたらず。しかしミシンの場合は、それを動かす動力を必要とせず、その発明は、工場制度をもたらず十分条件とはなりえなかった。前述のような、ロンドンにおけるチープ・レーパー、特に既婚婦人の存在が、家内工業を生み出していったのである。そして、一たび家内工業が広がると、これが更に工場制度の展開を妨げる要因として作用することになった。ハバカックによれば、家内工業が、半農半工という形を取る時に、工場制度の発展は最も妨げられるという。⁽⁸⁾つまり、農業によって、ある程度の生活が維持されている為に、労働力コストを低くおさえることができるからである。これと同じことが、既製服製造業における家内労働者にもいえるであろう。この産業に携わる人々の、ほとんどが既婚婦人であり、彼女達の賃金は、家計補助という名⁽⁹⁾

目で、極端な迄に押下げられるからである。⁽¹⁰⁾低廉な、しかも、家事の合間に仕事を行える家内労働をむしろ好都合とする労働力が、豊富にある限りにおいては、工場制度移行への誘因は、ほとんど存在しないといっているであろう。

(2) チープ・レーバーの社会的基盤

トーニーは、既製服製造業における家内労働者の存在を、次のように分析している。

一般に衣服製造業は、工場、仕事場、家内工業という3つの形態で行われている。ところで、この3つの制度が、お互いに依存関係にあって共存している、つまり、安価で質の悪いもの、外国向けのものは家内工業によって作られるという分業関係があって、この3つが共存しているのだ、という説があるが、これは誤りである。適切な機械と組織のもとにある工場においては、適切な賃金、労働環境で、安価な低級品が作られている。家内工業の存在は、その製品の質とか市場によって説明されるのではなく、このような低賃金労働⁽¹¹⁾に応じる婦人労働者が存在するか否かによって決まる。

このようにトーニーは、家内工業の基盤を婦人労働者に求め、更に、婦人の工場雇用の多いランカシャー、ヨークシャー、又男性の賃金の高い炭坑都市ダラムにおいては、家内工業は存在しないこと、反対に、男性の雇用が不規則又は低賃金であるロンドン、東部農村地域に、家内工業が広まっていることに注目し、家内工業は、女性の工場雇用の少ないところ、又男性の賃金の低いところ或いはその雇用の不安定なところに広まるとの結論を出している。⁽¹²⁾苦汗労働の存立基盤といわれた既婚婦人労働者が、実は男子労働者の存在形態に、大きく規定された存在だということが明らかになるのである。

そしてこの男子労働者こそが、ロンドンにおいては、既述のような理由で、チープ・レー⁽¹³⁾バーのプールを形成していた人々なのである。彼らは臨時雇労働者として、極端に不規則な雇用条件のもとに置かれ、家内工業のもう一角を形成していた。ブースのいうまさに階層Bであり、彼らの競争がその上の階層の足をひっぱり、貧困の最大の原因となっていたとされた階層である。⁽¹⁴⁾その代表的な例としてあげられるのが、毎朝ドック会社の門の前で、時間ぎさみの雇用を求めて、群をなして並んでいるドック労働者の姿である。彼らの一日の平均労働時間は3時間、週平均賃金は、7 s. ⁽¹⁵⁾といわれ、これは、ブースが貧困の基準とした、21 s. と比べて、いかに低いかが明らかである。しかもドック労働者は、あらゆる職業から落ちこぼれた人々の集りであり、比較的高年令、したがって、ほとんどが既婚者である。このような低賃金で、何故生活していくのが可能なのか。それは、その妻達が家内労働者として、家計補助を行っているからに他ならなかった。その妻達は、家計補助労働故に低賃金を余儀なくされ、その夫達は、妻の賃金があるが故に、いつまでも臨時雇用に残るといった悪循環が作りあげられていたのである。この悪循環こそが、家内

工業を存続させる、まさに原因なのである。

- (1) 1861年には、全国の衣服製造業に携わる者の4分の1をロンドンで占め、かつ、ロンドンの全被用者の10分の1が、この産業に従事している。(P. G. Hall, op. cit., p. 39.)
- (2) S.P. Dobbs, *The Clothing Workers of Great Britain*, London, 1928, p. 7.
- (3) G. S. Jones, op. cit., p. 359.
- (4) Report by Dr. W. Ord on The Sanitary Circumstances of Dressmakers and other Needle Women in London, 1865, quoted in R. Pike, *Human Documents of the Victorian Golden Age*, London, 1967, pp. 170-173.
- (5) しかし、既製服の製造が、この時期にはじめて行われたわけではない。これが一般に想像されているより早い時期から行われていたことについては、R. J. Mitchell & M. P. R. Leys, op. cit., p. 254, 松村訳、前掲書、194頁参照。
- (6) 他にも、B・ウェブのいう「階級的罪意識」(B. Webb, op. cit., p. 191.) に代表されるような社会意識の変化も認めるべきであろう。(J. Roebuck, *The Making of Modern English Society from 1850*, London, 1973, p. 65.)
- (7) ロンドンではミシンの賃貸制度が広く行われ、毎週 2s. 6d. を払込めば貸出され、計 7ℓ になれば自分のものとなった。(S.C. on the Sweating System, P.P., op. cit., vol. 13, p. 193.)
- (8) H. J. Habakkuk, *American and British Technology in the Nineteenth Century*, Cambridge, 1962, p. 164.
- (9) トーニーによれば、ロンドンの家内労働者の婚姻状況は、次の通りである。既婚68.1%, 未亡人20.4%, 独身11.5%。(R. H. Tawney, *The Establishment of Minimum Rate in the Tailoring Industry*, London, 1915, p. 194.)
- (10) 彼女達が、どのような労働条件で働いていたかは、「上院苦汗労働委員」の証言録の中に詳しい。賃金については、S.C. on the Sweating System, P.P., op. cit., vol. 17, pp. 495-504. を参照。種々の数値が出されているが、ほとんどが10s以下。平均6s程度であろうか。しかも、ここ数年の賃金低下を嘆く声が多い。
- (11) R. H. Tawney, op. cit., pp. 16-23.
- (12) Ibid., p. 186.
- (13) 婦人の家内労働者のうち、 $\frac{3}{4}$ 近くが、いわゆる労働者と呼ばれる人々の妻や娘である。(Ibid., p. 193.)
- (14) ブースは、この階層Bを完全に除去することこそが、貧困の唯一の解決策であると述べている。(C. Booth, op. cit., 2nd series, vol. 1, p. 154.)
- (15) S.C. on the Sweating System, P.P., op. cit., vol. 13, p. 135. ドック労働者にしても、当初からこのように不安定な職業だったわけではなく、外国との競争、蒸気船の発達の原因によって、次第に臨時雇用化していったのである。その過程については、B. Webb, "The Docks", C. Booth, op. cit., 1st series, vol. 3, ch. 2; G. S. Jones, op. cit., ch. 5; 前川嘉一『イギリス労働組合主義の発展』1965年、第2章参照。

VI おわりに

以上、われわれは、家内工業の広範な広がり、チープレーバーの存在に求め、それがロンドンという都市において、どのように形成され、どのような存在形態をもっていたかを考察してきた。ところが、そのチープ・レーバーの根本形態である既婚婦人も、男子労働者の存在形態に、深くかかわっているものであることが指摘された。臨時雇労働者たる

夫と、家内労働者たる妻とが、相互に、その苦汗労働としての労働形態を助長し合っているのだという事実に達したのである。そしてこの事実こそが、家族の貧困を形成する原因なのである。

20世紀に入ると、この家内工業は、次第に姿を消していく。その原因としては、社会立法の成立⁽¹⁾、一般労働組合の拡充等⁽²⁾が考えられるが、しかしこれだけでは、根本的解決とはなり得ない。家内工業が既述のような構造をもつ以上、チープ・レーバーのプールを解消せしめることが第一に必要とされるからであり、これが行われない限り、社会立法や労働組合は、家内工業の範囲を狭くはするが、かえってその作用を強める面をもつからである。

家内工業解消の過程を探る要因としては、さしあたり、チープ・レーバーを生み出していった雇用構造が、どのように変化していったか、更には、その前提となる産業構造がどのように変化していったかを促えること、そしてもう一つ、既婚婦人の労働形態が問題となる以上、又家族内における夫と妻の雇用状態が問題となる以上、当時の労働者の家族関係を考察することが考えられる。この時代における家族の機能、家族構成員の経済的役割、特に婦人の地位、家計等の分析が必要となるであろう。これらについては、まだ資料が少いが、アンダーソンをはじめとして、最近幾つかの研究が行われていること⁽³⁾に注目しておきたい。以上の2点が、当面、今後の課題となるであろう。

- (1) B. ウェブは、苦汗労働解消のための唯一の矯正策を法的規制に求めている。(B. Webb, "How to do away with the Sweating System", S. & B. Webb, *Problems of Modern Industry*, London, 1902, ch. 6.) しかし、この見解が楽観的なものであるとの批判については、高橋克嘉、前掲論文参照。
- (2) その象徴的な出来事が1889年のドック労働者のストライキであるが、この結果一部の者にとっては雇用の安定性が増したが、他の者については、雇用の機会が一層減るという面ももっていた。(G. S. Jones, op. cit., p. 317.)
- (3) M. Anderson, *Family Structure in Nineteenth Century Lancashire*, Cambridge, 1971; E. A. Wrigley (ed.), *Nineteenth Century Society*, Cambridge, 1972; P. Laslett (ed.), *Household and Family in Past Time*, Cambridge, 1972.

(1973. 9. 17)

(筆者の住所：東京都目黒区駒場2-9-3)